2025 ANNUAL REPORT

SMCGS

Aoyama Gakuin University

Schoonmaker Memorial Center for Gender Studies

ジェンダー研究センター　2025年度年次報告

ごあいさつ

2025年度も、ジェンダー研究センターの活動にご関心とご支援を賜り、誠にありがとうございました。

昨年度は、新たな環境での運営体制も徐々に定着し、センターとしてより安定した活動基盤を築くことができました。また、例年以上に多様なイベントや企画を実施し、学内外の多くの皆さまと交流・連携を深める機会にも恵まれました。

本記録では、2025年度の年次記録として、活動・事業をご報告いたします。

今後とも、ジェンダー研究センターの活動へのご理解とご支援を賜りますようお願いいたします。

2026年6月

青山学院大学
スクーンメーカー記念ジェンダー研究センター
センター長　申 恵丰（しん へぼん）

目　次

当センターについて ……3

活動記録 ……5

活動報告

- 研究事業……6
- 教育事業……11
- 社会貢献事業……17
- その他の事業……24

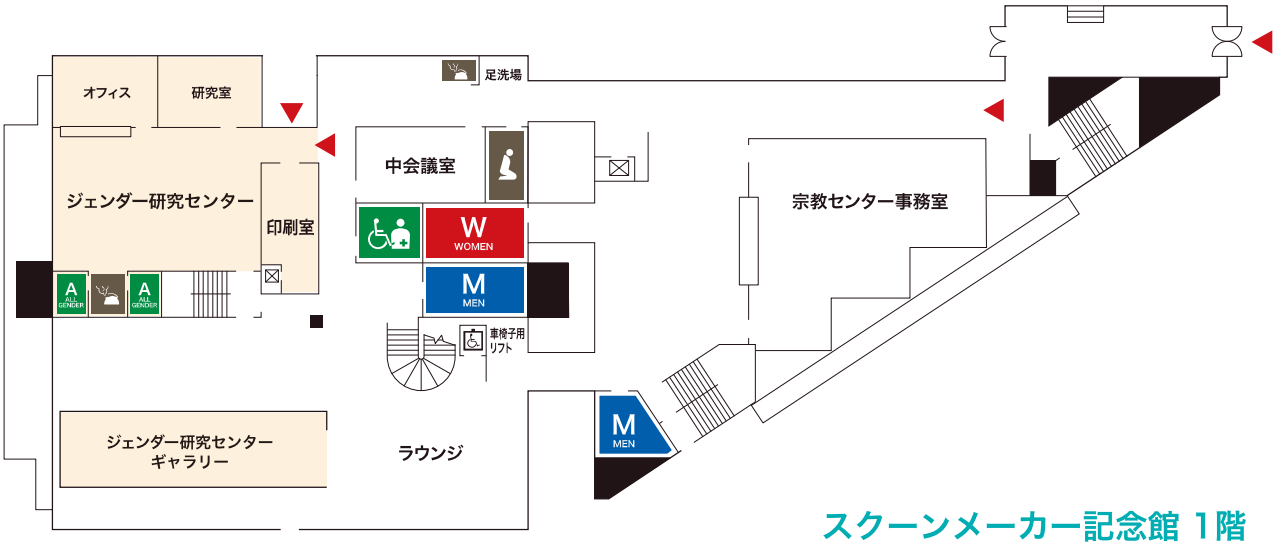
特記事項 ……30

青山学院大学
スクーンメーカー記念ジェンダー研究センターについて

Aoyama Gakuin University
Schoonmaker Memorial Center for Gender Studies

センターの名称は、青山学院の源流であり最初に開校された女子小学校を創設した、米国メソジスト監督教会婦人宣教師のドーラ・E・スクーンメーカーに由来します。青山学院の創立記念日はスクーンメーカーがこの女子小学校を始めた日であり、青山学院の歴史は女子教育から始まったといえます。その後、名称の変更、移転などを経て、女子教育の蓄積と成果は青山学院女子短期大学にひきつがれましたが、女子短期大学の閉学後、青山学院の女子教育の歴史を検証し、新しい時代に継承するため、短大ジェンダー研究所が設立され、2021年度、大学附置のジェンダー研究センターに移管されました。

開室時間：月～金 10:00-18:00　土・日・祝日（授業日を除く）および休業期間は閉室
場所：青山キャンパス　スクーンメーカー記念館（旧女子短期大学図書館）1階



スクーンメーカー記念館 1階

センターのロゴマークについて

2023年度、本学生を対象にセンターの公式ロゴマークを公募して、国際政治経済学部4年（当時）の吉江美翔さんの作品に決まりました。5人の人間をイメージする『SMCGS』の文字を、色や形、サイズを変えることによって、異なった価値観や容姿、文化のもとで生きてきたことを表しており、「誰かに合わせようとしなくてもいい」というメッセージが込められています。

センターの目的

センターは、青山学院大学が、青山学院女子短期大学において行われていたジェンダー研究を受け継ぎ、青山学院における女子教育の伝統を新しい時代に継承するとともに、キリスト教精神に基づいた、本学におけるジェンダー研究の遂行及びジェンダー教育の発展を通じて、青山学院及び社会におけるジェンダー平等及び性の多様性の尊重に貢献することを目的とします。

ジェンダー研究センターの活動

研究・教育・社会貢献の三つの事業を柱として活動し、ウェブサイトやギャラリーでの情報発信を行っています。

メンバー

ジェンダー研究センターにはセンター長、副センター長、運営委員会、実務委員会が置かれており、センターの運営を行っています。正副センター長と委員は大学の専任教員と職員が務めており、センターには２名の専任助手が常駐しています。

専任助手紹介

下村 沙季マリン（専門：国際人権法、ジェンダー法学）

2022 年度よりセンター助手を務めている下村と申します。実は私自身も青山学院大学の出身（法学部で、申ゼミに所属していました）で、こうして母校でジェンダー平等や性の多様性の尊重を促進するための活動に携われていることをとても嬉しく思っています。

私の専門は国際人権法とジェンダー法学で、最近は「スポーツとジェンダー」という領域にも関心があります。現在、週４日センターにいます。

うっかり仕事をほったらかしてしまうくらい学生の皆さんとおしゃべりするのが好きなので、もしも見かけたら気軽に話しかけてください！　ジェンダーやセクシュアリティに関する質問、キャンパスライフにおける悩み、日々の愚痴…などなど、なんでもお聞かせください。

森脇 健介（専門：法哲学、法思想史、ジェンダー法学）

2025 年度より着任しました、センター助手の森脇と申します。これまで性と生殖の自己決定権というテーマを、法学・思想・歴史などの観点から研究してきました。青山学院大学の地で新しい出会いと経験を積みながら、学内と社会におけるジェンダー平等の実現に貢献できればと思っています。

誰しも、いつの間にか自分の性や身体に、自分のありたい姿や望む行動からかけ離れた「ジェンダーの秩序」を押し当てられた経験があるのではないでしょうか。そうした経験へのふとした疑問から、ジェンダーや平等について考えてみたい、という扉が開かれるのだと思います。一緒に考えてみませんか？

センターには月〜木に在室していますので、疑問など何かありましたら、遠慮なく声をかけてください。

ジェンダー研究センター　2025 年度活動記録

＜2025 年＞

4 月 1 日	入学式にて性的同意ハンドブックを全新入生に配布
4 月 11 日〜(月 2 回・定期開催)	「コミュニティスペース」開始
4 月 26 日〜7 月 12 日(全 7 回)	エンパワーメントプログラム ジェンダーと表現［造形表現・織ワークショップ］(前期)
4 月 26 日	出版記念講演会「アメリカ帝国主義のキリスト教に抵抗して ー戦争・性暴力サバイバーの視点からー」
5 月 21 日	展示「STAND Still 性暴力サバイバービジュアルボイス写真展」関連イベント：トーク ＆ ワークショップ「その後 佇んで、見えたもの ー写真が可視化する私たちの社会」
6 月 7 日・6 月 8 日	Tokyo Pride 2025 にて渋谷インクルーシブシティセンター＜アイリス ＞・聖心女子大学グローバル共生研究所・津田塾大学・実践女子大学との協働でブース出展
6 月 21 日・7 月 26 日	ジェンダーと表現［造形表現・版画ワークショップ］(前期)
6 月 28 日	インプロワークショップ『ザ・ベクデルテスト』
6 月 30 日〜7 月 11 日	「QUEER LIBRARY WEEKS - クィア・ライブラリー・ウィークス -」 企画 1：7 月 2 日 ワークショップ「クィアな視線で本を読む。」 企画 2：7 月 9 日 ワークショップ「五・七・五・七・七で考える ジェンダーとセクシュアリティ」
9 月〜2026 年 1 月	青山スタンダード科目「いのち・女性・社会」企画および実施
9 月 20 日〜12 月 13 日(全 7 回)	ジェンダーと表現［造形表現・織ワークショップ］(後期)
10 月 7 日	Aoyama Gakuin Global Week 2025 講演会「ジェンダーと国際協力」(協力)
10 月 15 日	ワークショップ「褒め言葉が実は差別 ？ マイクロアグレッションについて学ぼう」
10 月 23 日	文学部日本文学科主催「松田青子文学フォーラムー『彼女』たちの労働・クィア・ケアー」(協力)
10 月 25 日	ジェンダーと表現［造形表現・版画ワークショップ］(後期)
11 月 5 日	映画『ブルーボーイ事件』試写会 ＆ トークセッション（共催）
11 月 8 日〜12 月 6 日(全 5 回)	青山学院大学青山キャンパス公開講座「ジェンダーと社会」開講
11 月 27 日	講演会「LGBTQ+ と大学生活 -LGBTQ+ のメンタル / ヘルスケア -」
11 月 29 日	シンポジウム「『やまとフェミニズム』を解体する - 私たちのフェミニズムが人種主義・民族主義・植民地主義と決別するために。-」
12 月 10 日	講演会「トランスジェンダー / ノンバイナリーの人々の Gender affirming care について ーLGBTQ+ のメンタルケア / ヘルスケアー」
12 月 20 日	早稲田大学ジェンダー研究所・教育総合研究所合同シンポジウム「なぜダイバーシティ教育を支える組織が大学に必要なのか」(後援)

＜2026 年＞

2 月 21 日	ワークショップ「ウクライナのろうけつ染め卵 プィーサンカ」
3 月 5 日	学生企画「もやもやカフェ @ 青山キャンパス」
3 月 25 日	ジェンダー研究センター年報 第 5 号 発行

「戦後沖縄に生きる女性たちのまなざしージェンダー、エスニシティ、アイデンティティ」

プロジェクトリーダー：安斎 聡子
研究期間：2024 年 4 月 1 日～2026 年 3 月 31 日
研究目的：戦後沖縄における女性研究には、膨大な語りの収集と厚い研究の蓄積がある。本研究では、この歩みに復帰 50 年余、戦後 80 年を迎える現在の女性たちの語りを重ねること、語りに現れる女性たちと沖縄、日本社会との呼応を、ジェンダー、エスニシティ、アイデンティティの観点から捉えることを目指す。

メンバー：安斎 聡子　コミュニティ人間科学部 教授
輪島 達郎　コミュニティ人間科学部 准教授
宮城 晴美　元琉球大学グローバル教育支援機構非常勤講師

研究報告（2025 年度）：
【研究プロジェクトの進展について】
2024 年度に引き続き、2025 年度も研究協力者に対するインタビューの実施とトランスクリプトの作成を実施するとともに、データの分析と、研究成果の取りまとめを行なってきた。概ね当初の計画に沿って研究が遂行され、今後の作業として論文の作成、発表による成果の公開を予定している。
【新たな学術的知見】
沖縄女性へのまなざしは、従来、「内」と「外」との関係性のなかで論じられてきたものであり、社会との相互作用の過程において形成され、また変容していくものであることが指摘されてきた。これを踏まえるならば、本研究の成果は、第一に、現代における沖縄女性へのまなざしとその社会的背景の一端を明らかにした点にあるといえる。さらに、外部（いわゆる「内地」）からの視点に依拠するのではなく、「内なるまなざし」、すなわち沖縄女性による沖縄女性への視点を中心に据えた点も、本研究の特徴の一つである。
たとえば、女性に限らず、従来、沖縄をめぐる視線として、沖縄出身者に対する差別意識の存在が指摘されてきた。本研究において島嶼部出身女性を対象に実施した調査では、「内地」への越境経験に関しては、若年層になるにつれて差別意識が相対的に低減する傾向がみられた。他方で、沖縄内部においてしばしば指摘されてきた地域間の差別や区分の意識は、若年層においてもなお一定程度存在していることが明らかとなった。また、所属集団において共有される「女性イメージ」を超えて女性たちが努力し活躍することに対し、内側から批判的に向けられるまなざしの存在も確認された。これらの知見が示唆するのは、「越境」という表現が必ずしも適切とはいえないほどに、表面的には均質化が進行している「内地」と沖縄、ひいては日本社会の状況である可能性である。同時に、沖縄社会内部における差異や格差の強調、さらには既存の女性イメージを保持しようとする力学と、それに抗する態度に対する反発が併存している現状も浮かび上がる。また、自らを伝統文化の担い手として位置づけるまなざしが、その後の生き方の選択や意思決定にまで作用している様相も確認され、「伝統」もまた女性たちの自己認識や他者認識に少なからぬ影響を及ぼしていることが示された。
沖縄女性をめぐる「内なるまなざし」もまた、沖縄と「内地」との関係性、さらには沖縄内部における社会的動向を反映しつつ、人々の相互作用のなかで絶えず変容し、今日の沖縄を生きる女性たちに具体的な影響を与えている。
【研究プロジェクトの組織運営】
インタビューの実施、トランスクリプトの作成を学内研究者 2 名が担い、データの分析等をプロジェクト構成員である外部の研究者を交えて共同で実施するなど、プロジェクト構成員間の意見交換において、円滑なコミュニケーションを図った。
【研究経費の執行】
本研究における経費の支出の大半は、インタビューのための出張旅費、トランスクリプトの外注費となっている。特にトランスクプトについては、近年精度の上がっている書き起こしソフト等を利用して、プロジェクト構成員によるトランスクリプト化を図るなど、経費の効率的な使用に努めた。
【情報発信】
2025 年度に一般公開の形で研究会を予定していたが、研究分担者の体調不良により、実現することが叶わなかった。情報発信については今後、学会発表、論文発表の形で実施していくこととしたい。

「開発途上国における女性の労働実態 ーペルー・モロッコ・ネパールの事例より」

プロジェクトリーダー：鳥塚 あゆち
研究期間：2025 年 4 月 1 日～2027 年 3 月 31 日
研究目的：本研究は、開発途上国における女性の労働実態の把握を主要な目的とする。南米、北アフリカ、南アジアの地域間比較から就労の背景にある歴史、法制度、社会規範等を検討することで、地域の特質と開発途上国に共通する課題を明らかにする。

メンバー：鳥塚 あゆち　国際政治経済学部 准教授
島村 靖治　国際政治経済学部 教授
前川 志津　国際政治経済学部 助手
佐藤 希　愛知学院大学 経済学部 講師

研究報告（2025 年度）：

本研究プロジェクトは、開発途上国における女性の労働実態の把握を目的とし、ペルー、モロッコ、ネパールの地域間比較からその背景や課題を検討するものである。1 年目にあたる 2025 年度はペルーとモロッコの二カ国で現地調査を実施し、翌年度に実施予定のネパール調査の準備も並行して進めた。調査前に 4 回、プロジェクト全体の方向性や調査すべき内容について打ち合わせを行うとともに、ペルーとモロッコについて構成員が相互に学び、各国の歴史的背景や社会構造などを理解するための研究会も併せて開催した。当初の計画通り 8 月から 9 月にかけて、鳥塚がペルーで約 1 週間、島村・前川・鳥塚がモロッコで約 10 日間、現地調査を実施した。

ペルー調査では、クスコ県の先住民共同体出身女性を対象に、文化人類学の手法を用いて聞き取りと参与観察を行った。滞在中、本プロジェクトの聞き取りに従事できたのは 5 日と短い期間ではあったが、4 人の女性から女性の労働状況の把握と教育との関係、現状の問題等に関して聞き取りを行うことができた。共同体での生業（牧畜）に携わる場合、学校教育は不要と考えられ、とくに女性に対しては顕著だった。4 名とも高等教育まで終了している者はおらず、なかには 6 年間の初等教育を終えていない者もいた。このような場合、町での物売りやレストランなどの給仕しか労働機会はなく、前者では 1 日の売り上げが 3000 円にもならないことも多いという。また、専門学校に通っていたが妊娠のため途中でやめざるをえず、専門職には就けないと話す者もいた。就学途中での妊娠・出産と専門性のなさが、労働機会や職種を制限する大きな問題であると言える。

モロッコ調査では島村が携わった国際協力機構 (JICA) による地方道路整備事業に関連して収集した家計調査データに基づき、当該調査の調査対象となった地方道路に沿って人々の生活を観察、同時に道路沿いで出会った人々に対し聞き取り調査を行った。モロッコ北部の都市を複数訪れ、特にシェフシャウエンでは 2 日間かけて農村部の家計の生活実態の調査を行った。同国では 2021 年に大麻の医療および産業利用を目的とした栽培を合法化しているが、北部高原では栽培に適した気候条件から合法化以前から広く大麻栽培が行われていたことが知られている。調査では、合法化後更に栽培面積が拡大している様子を確認することができた。女性の労働実態との関連でいえば、女性が収穫後の大麻を背負って運ぶ姿を確認することができた。モロッコではイスラム教に基づく社会的な価値観により女性の家庭外での就労機会が大きく制限されているが、家族ビジネスである大麻栽培には女性も関与している実態が明らかとなった。

これらの調査で得られた成果については、2026 年 2 月 25 日に研究会を実施し、それぞれが報告を行い、両国での共通点や、国・地域ごとの労働実態の背景について議論した。この成果は、次年度に実施するネパール調査にも反映したい。

ネパールについては、2026 年度の現地調査にむけて、文献調査、情報収集、および研究会を 1 回実施した。研究会では、調査で明らかにするべき問いをより具体的に精査し、具体的な調査日程と予算計画をたてた。3 月に第 2 回研究会を予定している。

経費としては、当初の予定よりペルーへの旅費が少なく、モロッコへの旅費および人件費の割合が多くなった。いずれも必要経費であり、得られた成果を鑑みると効率的・効果的に使用できたと言える。情報発信としては、国内外の学術誌への論文掲載を試みている。また学内においては、Global Week 講演会で島村が報告を行った。講演では、国際協力事業の事例からインターセクショナリティの問題やエンパワメントの多層性について指摘した。本講演は大学のみならず初等部以降の生徒や系属校からも参加があり、本学院におけるジェンダー研究の周知に貢献できた。

「青山学院における女子教育の検証　ーオーラルヒストリー・プロジェクト IIIー」

プロジェクトリーダー：小林 瑞乃
研究期間：2025 年 4 月 1 日～2027 年 3 月 31 日
研究目的：青山学院女子短期大学の来歴とそこに学んだ学生達の学びの総体について、個々人の経験や思い出の中に探求し、学院における女子教育の歴史的意義を未来に向けた資産として継承・発展していくことを目指す。

メンバー：
小林 瑞乃　コミュニティ人間科学部准教授
河見 誠　コミュニティ人間科学部教授
後藤 千織　コミュニティ人間科学部准教授
菅野 幸恵　コミュニティ人間科学部教授
西山 利佳　コミュニティ人間科学部准教授
山田 美穂子　コミュニティ人間科学部教授
輪島 達郎　コミュニティ人間科学部准教授
趙 慶姫　青山学院大学 特任教授
（所属等は 2025 年度時点のもの）

研究報告（2025 年度）：

本研究プロジェクトは、短大同窓会 7 支部の全面的な協力のもと、メンバーで分担して 2 人一組になってインタビューを行う聞き取り調査である。同窓生の集う各支部の総会実施に合わせて、その前後に聞き取り調査を行った。インタビューに際しては、流行している感染症の対策なども含め細心の注意をした上で行った。

第 1 期・第 2 期の調査に引き続き今年度からは第 3 期として 1970 年代後半以降（昭和 50 年代）の卒業生を中心に個別インタビューを行い、当初の研究目的に沿って進展することができた。

聞き取り調査にあたっては事前に質問事項（進学の理由、入学後の変化、授業や礼拝、学校生活、寮、キリスト教教育などに関して記憶に残っていること、卒業後の進路選択、現在の生涯教育やボランティアに関する活動について、自身にとっての「青短」の意義など）を示し、それについての応答を聞きながらさらに質疑を加えていくことで、相互に理解を深めることができた。

こうしてインタビューを行った結果、地域的な差や入学年度による違い、時代状況など、様々な相違や共通点と共に、それぞれの個性的な違いが加わって、想像した以上に多様で貴重な経験･認識の総体としての「青短」論を収集することができた。

以上のように、今年度の研究活動として行った聞き取り調査によって活字資料だけでは知る事のできなかった新たな知見を得ることができた。来年度も聞き取り調査を進めてさらにインタビューの成果を蓄積することで、女子教育とキリスト教を軸とした独自な教育が学生にとって果たした役割と課題をはじめ、女性のライフヒストリーの具体的な事例、ライフキャリアの実態把握、特質、社会的位置づけなどを含め、短大における女子教育の諸相を把握し、学生にとっての「青短」、学びの場としての「青短」の意義を検証し、日本社会に果した歴史的教育的資産を明示できるよう努力を続けたい。

また、本研究プロジェクトでは、構成員相互の有機的な連携を保ち、連絡を密に取り合って情報交換を行いながら調査を進めるなど常に関係を深めている。担当地域のインタビューについて各自で報告書を作成し、全体で聞き取り調査の報告会を行って、調査結果に関する分析・検証など、全員で活発な研究活動を展開していく組織となっている。研究経費も効率的・効果的に使用されている。

「性の多様性の尊重への貢献を目的とした包括的ジェンダー研究」

プロジェクトリーダー：西本 あづさ
研究期間：2025 年 4 月 1 日～2027 年 3 月 31 日
研究目的：ジェンダー研究センターに所属する助手 2 名がそれぞれの関心や専門領域に従ったジェンダー研究を行うことで、ジェンダー研究センターの理念である「青山学院及び社会におけるジェンダー平等及び性の多様性の尊重への貢献」への寄与を目指す。

メンバー：
西本 あづさ　文学部教授
下村 沙季マリン　ジェンダー研究センター助手
森脇 健介　ジェンダー研究センター助手

『灰の箴言』出版記念講演会「アメリカ帝国主義のキリスト教に抵抗して ー戦争・性暴力サバイバーの視点からー」

2025 年 4 月 26 日
講演者　リタ・ナカシマ・ブロック
司会、通訳　福嶋裕子
(「フェミニスト神学を通して考える思想と実践の総合的研究」研究プロジェクトリーダー)



『灰の箴言』は、青山学院大学ジェンダー研究センターからの助成により、出版することができました。正確には 2023 年度研究プロジェクト「フェミニスト神学を通して考える思想と実践の総合研究」の成果の一環として、2025 年 3 月末に翻訳出版されました。『灰の箴言』は、二人の女性の神学者リタ・ナカシマ・ブロックとレベッカ・アン・パーカーが、それぞれに抱えていた個人的な痛みを神学的にどのように位置づけ、癒やしていったかを語る本です。リタにとっての悲しみは、父親がアメリカ人の職業軍人で、母親が日本人であることから生じた家族の亀裂や人種差別であり、レベッカにとっての痛みは、幼少期に隣人から受けた虐待でした。

伝統的なキリスト教は、基本的にキリストが十字架上で苦しまれたように、信徒に苦しみを忍耐し受容することを教えます。しかしリタは、アメリカで日系人であることの生きづらさの原因が自分自身にあるのではなく、社会構造にあることを学んでいきます。私的に耐えるのではなく、社会を変えるためにフェミニスト神学を手探りで学んでいった過程が、『灰の箴言』には書かれています。

今回リタは、『灰の箴言』の翻訳出版の記念講演会のために来日してくれました。講演の前半の内容はリタの家族のことが中心だったため、詳細は省きます。ただ興味深かったのは 1952 年になるまでアメリカ軍部は、米兵と日本人女性の結婚を禁じていたことです。これ以前に生まれたリタの場合、米国籍を収得するために複雑な法的手続きが必要でした。リタの父親ロイ・ブロックと母親のナカシマアヤコが苦心して、1956 年に渡米した詳細が語られました。

もう一人の著者レベッカは、今回、来日はかないませんでした。しかし『灰の箴言』の中で紹介された、従来のキリスト教が強調する自己犠牲的な愛を否定することの意義をレベッカの実例を通して、リタが説明してくれました。つまり、自分の感情を消す形で自己犠牲を行うと、最後には家族や最愛の人との人間関係が壊れ、その人自身が癒やすべき感情を癒すことができずに、罪悪感の中に取り残されることになります。自己犠牲が強いる沈黙と孤立は、結局のところ、誰にとっても救済ではないのです。救いとは、だれもが神に愛されていることを知り、神に守られて人間が成長する時に起こるものだとリタは定義しました。

贖罪に関する神学的に些か難解な会話もなされましたが、誤解を防ぐために、以下、リタの講演会での言葉を通訳したものが残っていますので、抜粋しておきます。

> 以下引用
> 古代の文献に犠牲という言葉が登場する時、それは祈りを表現する言葉でした。「犠牲を捧げる」とは、祈ることを意味しました。それに、殉教者が尊敬されるのは、かれらが死んだからではありません。殉教者は、愛のうちになされる信仰共同体への献身がとても強く、死に至るまで裏切らなかったからです。……私たちが自己犠牲、特にイエスの自己犠牲に焦点を当てる時、恐ろしい拷問、暴力、戦争の加害者を神の意志の実行者にしてしまうといった道徳的な泥沼が作り出されます。暴力と苦しみを神聖化してしまうのです。私たちが信仰の証言と勇気に焦点を当てる時、恐怖のうちに死ぬことではなくて、共有された共同体と信仰を大切にします。そうした共同体と信仰のために私たちは喜んで自分の命を危険にさらすでしょう。
> 以上引用終わり

講演会後の雑談で、興味深かったのは、アメリカの教会の牧師たちは年に一度、セクシュアル・ハラスメントに関する講習会を受け、テストに合格することが義務付けられているという話でした。その義務づけを実現させたのは、邦訳『灰の箴言』の 14 頁と 299 頁に一瞬だけ登場する、性的暴力と家庭内暴力に関するセンターのセンター長マリー・フォーチューンという女性の教育者だったということです。口頭で聞いただけなので、不正確な部分もありますが、日本の教会にも是非、必要な制度ではないかという思いがいつまでも消えません。(福嶋裕子)

シンポジウム『「やまとフェミニズム」を解体する ー私たちのフェミニズムが人種主義・民族主義・植民地主義と決別するために。ー』

近年、日本ではますますフェミニズム運動が活発に展開し、社会の意識や制度にも少しずつ変化が生まれつつあります。

しかしながら、その一方で、人々が抱える多様なアイデンティティや属性の交差点にはフェミニズムの視線が十分に届いていない領域が存在するといえます。それは、本来は抑圧の構造を問い直すはずのフェミニズムが、その内部において別の抑圧や排除の構造を再生産してしまう現実があることを意味しています。

このような中、ジェンダー研究センターは様々なアイデンティティや属性の中でも特に「人種」や「民族」という属性に焦点を当て、現在の日本におけるフェミニズムを人種主義・民族主義・植民地主義の視点から問い直すためのシンポジウムを企画しました。

そうして実施されたシンポジウム『「やまとフェミニズム」を解体する ー私たちのフェミニズムが人種主義・民族主義・植民地主義と決別するために。ー』は、多様なバックグラウンドをもつ研究者を迎え、単なる批判に終わるのではなく、より多くの人を包摂した「私たち」の連帯を実現するための言葉と実践をともに模索する場とすることを目的としました。

タイトルにある「やまとフェミニズム」とは、登壇者のひとりである荒木生（あらき・うぶ）氏が発案した概念です。「人種」や「民族」をめぐってフェミニズム内でしばしば散見する、「ホワイトフェミニズムの概念をそのまま国内に輸入することはできない、なぜならば日本人女性はみんなマイノリティ側のアジア人だからだ」という言説を否定し、国内に存在する人種・民族的マイノリティ属性を持つ女性を排除するフェミニズムを可視化する荒木氏の試みが、今回のシンポジウム企画の源流にあるといえます。

また、荒木氏に加え、ハーフ・ミックス研究の第一人者である田口ローレンス吉孝（たぐち・ろーれんすよしたか）氏、在日コリアン当事者研究の蓄積に多大なる寄与をされてきた孫片田晶（そん・かただ・あき）氏にもシンポジウムの趣旨にご賛同いただき、ご登壇をご快諾いただきました。荒木氏は旧植民地ルーツを持つ方であり、田口氏は米国白人の祖父、沖縄人の祖母、白人と沖縄人のハーフである母、秋田出身の日本人である父をお持ちの方です。そして孫氏は、在日朝鮮人 2 世の母と日本人の父を持つ方であり、このように本シンポジウムでは、当事者である研究者の方にご登壇いただくことを大切にしました。

シンポジウム当日は、はじめに荒木氏に『「誰が『私たち』に含まれないのか－交差点から『やまとフェミニズム』を問う－」というタイトルで「やまとフェミニズム」の排他性と脱植民地的再構成の必要性を論じていただきました。その次に田口氏にご登壇いただき、「『日本人』イデオロギーに内在する『やまと性を認識する』ー植民地主義とレイシズムに抗うためにー」と題して、「やまと至上主義」の問題について「白人性イデオロギー」との類似性に触れながらお話しいただきました。その後、孫氏に「在日朝鮮人女性と連帯 - フェミニズムの周縁における経験の断片から」とのタイトルで、その連帯の歴史や困難に関して語っていただきました。



後半では、ディスカッション・質疑応答の時間を取り、会場の方々から非常に示唆に富んだ質問をたくさんいただき、登壇者の方々から意義深い回答をいただきました。

本シンポジウムは 300 名近い方からお申込みをいただくなど、ありがたいことに多くの注目をいただきました。また、当日もたくさんの方にご参加いただきました。排外主義が加速する今、フェミニズムの観点から共有の問題意識を有して連帯の方法を模索する人たちが確かに数多くいるというのだという事実を実感し、企画者としても確かに希望を持つことのできる時間となりました。



トークイベント「その後 佇んで、見えたもの ― 写真が可視化する私たちの社会」







5 月 21 日（水）、ギャラリー展示「STAND Still 性暴力サバイバービジュアルボイス写真展」の関連イベントとして、トークイベント「その後 佇んで、見えたもの ― 写真が可視化する私たちの社会」（STAND Still 東京との共催）を開催しました。

STAND Still 東京はさまざまなバックグラウンドを持つ性暴力サバイバーが立ち上げた団体です。STAND Still には「たたずむ」という意味とともに、「性暴力を取り巻く社会のあり方を静かに見つめる」という思いが込められています。本団体が展開するプロジェクトは、性暴力被害者にまつわる従来の「かわいそう」といった一面的なイメージからサバイバーを解放するとともに、これまで「撮られる側」として捉えられがちであったサバイバーが「写す側」となることで、社会に存在する偏見への気づきを促す取組として行われてきました。

トークイベントでは、プロジェクトで講師を務める写真家の大藪順子氏より、プロジェクトが参加者にもたらした変化、さらにワークショップを通じて生み出される作品や展覧会が観覧者に与える影響についてお話しいただきました。続いて、STAND Still 東京の代表やメンバーから、写真作品の紹介や撮影に込めた思い、作品がどのように受け止められてきたかについても共有されました。

事後アンケートでは、「サバイバーであると声を挙げたとき、その人の中にはさまざまな要素があるにもかかわらず、すべての属性がサバイバーになってしまう」ということや、「相談窓口に行きつけないのは言語化が難しいから」といった話が印象に残ったとの声が寄せられました。こうした感想からも、本プロジェクトが、写真という表現を通じて、被害者イメージを自分自身や社会の中で問い直していく重要な取組であることがうかがえました。

私たちの社会には、「当事者」が困難に向き合いながら前向きに生きる姿を求められる傾向があります。犯罪被害者に限らず、被災者や障がいのある人、人種差別の被害を受けた人などにおいても、メディアを通じて特定のイメージが強調されることがあります。そうしたあり方が、他の当事者にどのような影響を及ぼしているのかを考えるとともに、その背景にある私たち一人ひとりの意識について見つめ直していくことも大切です。

今回のギャラリー展示およびトークイベントが、そうした気づきや対話のきっかけの一つとなれば幸いです。

ワークショップ「褒め言葉が実は差別？ マイクロアグレッションについて学ぼう」

「マイクロアグレッション」とは、明らかな差別に見えなくとも、先入観や偏見を基に相手を傷つける行為のことを指します。例えば、会議で「やっぱり女性ならではの感性が必要ですよね」と発言する、“外国人風”の見た目の人に対して「日本語上手ですね」とほめる…などがあたります。大学に入学すると、様々なバックグラウンドを持った人との交流が増えます。多様性を尊重できる交流方法を学内で広めるために、センターは 6 月 12 日にワークショップ「褒め言葉が実は差別？ マイクロアグレッションについて学ぼう」を開催しました。当日は青山キャンパスで対面開催し、相模原キャンパスにも中継をつなぎました。

講師には、在日コリアンカウンセリング＆コミュニティセンター（ZAC）センター長の丸一俊介さんをお招きしました。丸一さんは書籍『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション 人種、ジェンダー、性的指向：マイノリティに向けられる無意識の差別』の翻訳に携わるなど、日々、精力的にマイクロアグレッションの問題に取り組んでいる方です。

ワークショップでは、はじめに丸一さんからマイクロアグレッションに関するレクチャーをしていただきました。オリジナル動画を通して、マイクロアグレッションの特徴、影響などを説明いただきます。また､マイクロアグレッションと一般的な｢からかい｣の違いなどに加えて､マイクロアグレッションを目撃した時の介入方法やマイクロアグレッションを受けた人の支え方など、第三者としてできることも教えていただきました。さらに、講師自身の加害者としてのマイクロアグレッションの経験を共有していただくことで、参加者が自身の行動について顧みる機会をいただきました。

後半では、参加者同士で事例をもとにグループワークを行いました。ミックスルーツの人、女性、性的マイノリティ、ムスリム、障害のある人などに対する多岐にわたるマイクロアグレッションの事例について、その問題点や介入方法をグループごとに議論しました。その後、挙がった意見を全体共有し、いくつかの事例については当事者によるコメントも加えて、さらに皆で考えを深めました。

事後アンケートでは、「これからの自分の言動に注意したいと思った」、「当事者の方の話を聞くことができて良かった」などの感想をいただきました。
本ワークショップは、センターとして 3 度目の開催となります。2026 年度以降も定期開催を目指して、学内における啓発をさらに広めていきたいです。





講演会「LGBTQ+と大学生活」

今年度、スクーンメーカー記念ジェンダー研究センターでは、初めての試みとして、「LGBTQ+ のメンタルケア／ヘルスケア」をテーマに、青山学院大学学部生・大学院生を対象にした連続講演会を開催しました。日本では、LGBTQ＋の人々が、メンタルケアとヘルスケアについてどこに相談に行けばよいのか、どのようなメンタルケアとヘルスケアが医学的に適切なのか、性別不合の診療に保険は適用されるのかなど、悩みごとをひとりで抱え込んでしまう、ということがしばしば起こっています。また、不確かな情報に基づく我流のケアによって、自分の心身を傷つけてしまうことも増えています。そこで、診療の最前線にいらっしゃるお二人の先生をお迎えして、LGBTQ＋のメンタルケアとヘルスケアについて、基本的知識から最新の情報までお話しいただきました。

（1）針間克己先生「LGBTQ+ と大学生活」（11 月 27 日）

針間先生は精神科医で、はりまメンタルクリニック院長。日本性科学会理事長、日本 GI（性別不合）学会の理事で、性別不合の診断基準とされる WHO 作成の国際疾病分類 ICD (International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems) -11（2022 年）の性の健康に関するレビュアー（原案査読者）も務められました。

針間先生はまず、セクシュアリティ、LGBT の概念について解説してくださいました。次に、Gender Incongruence（性別不合）が「精神疾患」ではなくなっていること（ICD-11）、また、1960 年代以降、同性愛を「異常」と見なすことに疑問が持たれて ICD-10（1990 年）で疾病から削除されたこと、日本でも 1990 年代に「性同一性障害」を精神疾患ではなくトランスジェンダーとして認識されるようになったことなどの歴史的経緯を説明されました。「性同一性障害」に関わる判例や、はりまメンタルクリニック年別診断書作成数の紹介もありました。MTF（Male to Female）よりも FTM（Female to Male）の診断書作成が圧倒的に多いことが注目されます。さらに、LGBT 理解増進法について解説。多様性の尊重、個々のセクシュアリティの重視、中立的価値観が LGBT への対応の原則であることを説き、「善意」で行われるアウティング（性的指向や性自認について当事者の了承を得ずに勝手に暴露する行為）がどのように起こってしまっているかにも話題が及びました。

その後、お話は「トランスジェンダーと大学生活」に移ります。トランスジェンダーへの配慮が必要な場面を一つずつ解説。名簿、語学の授業での敬称、ゼミ合宿、教育実習、入試基準など、想像以上に配慮が必要な場面があることに気づかされました。そして、LGBT には、性自認が揺らいでいる場合と性自認が明確である場合があり、また性自認が明確であっても生活上のあり方にはさまざまなケースがあり、人によっては診断があってもそれを信頼しない、など行動は千差万別であり、何を基準とすべきかは今も模索されている、と結ばれました。



参加者からは、大学生活におけるトランスジェンダーについて、さまざまな質問が寄せられました。大学生活に適応しているトランスジェンダーの人の共通点は何かという質問への、「過剰に適応しようとしないことです」という答え、また LGBT の人に接するときに気をつけることは何かという質問への、「特別視しないことです」という答え、そして「動画を見過ぎないように」ということばは、特に心に残るものでした。

参加者は学生 15 名。その他、青山学院の教職員が多数参加しました。

講演会「トランスジェンダー／ノンバイナリーの人々のGender-Affirming Careについて」

（2）池袋真先生「トランスジェンダー／ノンバイナリーの人々の Gender-Affirming Care について」（12月10日）

池袋先生は産婦人科医で、日本 GI（性別不合）学会認定医、医療法人社団マキマ会 パーソナルヘルスクリニック横浜院院長、同上野病院勤務医です。世界トランスジェンダー学会（WPATH）、ヨーロッパトランスジェンダー学会（EPATH）などの国際学会講演やその他の海外講演も積極的に行い、トランスジェンダーとノンバイナリーのヘルスケアに関する最新の知識を持っていらっしゃいます。

池袋先生は、冒頭で「飛行機に乗って健康診断を受けに行ったことがある人はいますか？」「目の前にトイレがあるのに、自分のトイレだけ1 km 先だったことはありますか？」と、聴衆に衝撃的な質問をします。実際、医療アクセスのハードルの高さから、トランスジェンダーやノンバイナリー（性自認が男性・女性どちらにも当てはまらない、と感じる人々）の人が国外へ健康診断を受けに行くことがあるとのこと。また、安心して使えるトイレが見つからないことは、多くのトランスジェンダーやノンバイナリーの人が体験しています。先生はこうした現状を示そうとされたのです。

次に、内科、婦人科・泌尿器科、美容に亙るジェンダー外来の診療内容や、安心して受診できるパーソナルヘルスクリニック（たとえば、名前で呼ばれない）などを紹介されました。そして、10 代のトランスジェンダーの現状が示されました。2016 年の論文によれば、性別違和感を自覚した時期の多くは、小学校入学以前・低学年・高学年です。性別違和感を抱くこどものセクシュアリティ・ジェンダーを、親など周囲の大人が決めつけないことが重要、と先生は訴えます。特にアウティングは、こどもの命を奪うことさえある、と言い添えられました。

さらにお話は具体的診療方法へと進みます。ホルモン療法・手術療法については、世界と日本のガイドラインを参考に、ひとりひとりが望む変化を確認しながら行われなければならず、定期的な医師の診察・血液検査がある病院を選択することを推奨されました。その説明の中で、10 代にはノンバイナリーが多いことに言及がありました。また、ヘルスケアについては、性別適合手術について詳しく説明した上で、戸籍上の性別変更が人生のゴールではなく、手術をしなければ「男」「女」になれないわけではなく、長期的に自分の人生を考えることが必要であることを、手術を希望する人たちにいつも伝えているとお話しされました。セクシュアルケアについては、性被害の問題を取り上げ、「どんなジェンダー・セクシュアリティでも、助けを求めて電話していいんだよ」というメッセージを強く伝えてくれました。そして、「どこに住んでいても、どんな年代でも、人種・国籍・ジェンダー・セクシュアリティが何であっても、心身ともに健康で長生きできますように」という温かなことばで講演は閉じられました。

参加者からは、ヘルスケアに関して多くの質問が寄せられました。ノンバイナリーのゴールは何かという質問に対する、「道は変わることもあります。ゴールは変えてよいものです」という答え、学生にできることは何かという質問に対する「高校生・大学生が作るクィアのチームもあります。10 代に考えたことを発信してゆくことが大切です」という答えには、参加者一同、ははっとさせられました。

参加者は 20 名。その他、青山学院の教職員が多数参加しました。



2回の連続講演を通じて、LGBTQ＋について最新の医学的情報を得ることの重要性を教えられました。LGBTQ＋、トランスジェンダー、ノンバイナリーについて、多様性を認める柔軟な考え方や人権を尊重する意思がいかに大切であるかを痛感しました。常識も意識も情報も、時代とともに変化してゆきます。今後、こうした学びの機会が、若い人々に接する学院内の教職員のために作られることを強く期待します。

QUEER LIBRARY WEEKS - クィア・ライブラリー・ウィークス -

6月30日（月）から7月11日（金）の2週間にかけて、文学を通してジェンダーやセクシュアリティについて考える期間「QUEER LIBRARY WEEKS - クィア・ライブラリー・ウィークス -」を企画しました。

「クィア」とは「ストレート」に対して「斜め」、「曲がった」、「歪んだ」という意味を持つ言葉です。ジェンダー／セクシュアリティにおけるマイノリティの人々は「ストレート」の人々（異性愛者）から向けられたこの言葉を逆手にとって、自分たちの存在を主張しました。

期間中はセンターのライブラリー内に、2人の助手によるおすすめの書籍紹介コーナーをつくったり、「あなたのおすすめの作品」、「センターに置いてほしい作品」などのテーマに対して参加者がふせんを貼ることのできるボードを設置したりして、空間を“WEEKS仕様”にデコレーションしました。さらには、配架している書籍を自由に持っていくことのできる本棚も特設しました。この本棚には、参加者からの書籍の寄付も歓迎としました。

2週間を通して、ジェンダーと文学に関心のあるたくさんの学生さんたちにセンターへ訪れていただき、ボードにふせんを貼ってもらったり、特設の本棚から書籍を取っていったり置いていってもらったりと、大変有意義な期間となりました。

また、WEEKSの間、次の関連イベントを2つ実施しました。

WEEKS企画ワークショップ1つ目は、7月2日（水）開催の「クィアな視線で本を読む。」です。物語―あるいは物語を読むという行為―は、社会の「当たり前」を映し出すと同時に、時にはそれを揺さぶる力も持っています。

クィアな視点で本を読むということは、そうした揺さぶりのチャンスを見つけ出して「こうあるべき」、「これが正しい」とされている関係や性のあり方に疑問を投げかける行為だといえます。

本ワークショップでは、読書サロンを主宰し、「イソップ クィアライブラリー」*にて選書を行った安田葵氏を講師に招き、クィアの視点から「文学を読み解く」ことについて語っていただきました。また、後半では参加者が実際に手元の作品をクィア・リーディングしてみて、その解釈について共有し、語り合う時間をつくりあげました。



2つ目のWEEKS企画ワークショップとしては、7月2日（水）に「五・七・五・七・七で考える ジェンダーとセクシュアリティ」を開催しました。日本で古来より詠まれている「歌」を通して、ジェンダーやセクシュアリティについて考え、表現にチャレンジしてみることを狙いとしたワークショップです。



当日は、これまでジェンダーやセクシュアリティに関する想いを詩歌に託してきた文芸家の堀田季何氏を講師に迎え、詩歌の歴史や作品の解釈などについてジェンダーとセクシュアリティの観点からレクチャーしていただきました。また、ワークショップの後半では参加者みんなで実際に歌を詠んでみました。どの方も短時間でつくったとは思えないほど完成度の高い歌を披露してくれて、堀田氏も感嘆していました。

上記2つのワークショップでは、イベントに事前申込みいただいた方に書籍の無料プレゼントを実施しました。

多くの学生が文学に触れ、またジェンダーやセクシュアリティに関するイシューに思いを馳せる期間になったのではないかと思います。



*2022年にAesopが開催したLGBTQIA+にまつわる文学作品のコレクション

授業科目の提供・ジェンダー関連科目紹介

「いのち・女性・社会」開講　青山スタンダード科目（テーマ別科目／社会理解関連科目）

センターの目的達成のための事業の一つとして「ジェンダー平等及び性の多様性に関する教育活動の企画及び運営」を掲げ、本科目の開設を企画しました。

ジェンダー平等を目指すためには、若い世代が、まず「女性」が歴史的、社会的にどのような位置に置かれてきたのかという事実を学ぶ必要があります。その場合、ジェンダー平等を机上ではなく実社会の中で実現していくために、自分と遠い知識や情報として受け取ることに終始することなく、血の通った実践知にしていくことが求められます。本科目はオムニバス形式により、不平等な状況、過酷な状況の中で、女性たちが重ねて来た活動について、当事者であるゲスト講師からお話を伺います。講師、受講生双方が表情や声音を感じあいながら質問や議論を行い、学生同士が参加しながら学んでいく授業です。

開講キャンパス：青山キャンパスと相模原キャンパスの隔年開講（2025年度は相模原開講、2026 年度は青山開講）
開講学期：後期
担当者：西山 利佳（青山学院大学コミュニティ人間科学部教授）
内容：

○トルコの女性の生活文化を通して、イスラムの多様性を知る。
○里親支援の現場からいのちを考える。
○新聞記者として出会った人々の実践の紹介を通して、女性や子ども・若者が直面している困難と課題解決に向けた取り組みを学ぶ。
○ストリートチルドレンの現状と支援及びメキシコのフェミサイドの実態を知る。
○カンボジア内戦のサバイバーの半生に出会う。
○放射線被曝から子どもを守る市民の活動を知る。
○杉並の女性たちが立ち上げた原水爆禁止運動を学ぶ。
○丸木位里・丸木俊「原爆の図」を中心に、社会問題と芸術の関係を考える。
○沖縄の基地問題の歴史と現状を学ぶ。
○戦時性暴力について、問題の所在を知り課題解決に必要なことを考える。
○福島と広島をつなぐ活動に携わる作家のライフヒストリーを通して、いのち・女性・社会を考える。

ジェンダー関連科目紹介

ジェンダーやセクシュアリティに関心がある学生の学びを深めるため、その見取り図となるよう、青山学院大学で開講されている科目からシラバスのキーワード検索で抽出し、「ジェンダー関連科目」としてリスト化しています。A科目（ジェンダーを学びの柱とする科目）、B科目（ジェンダーを学びの一部としている、あるいはジェンダーについて一回以上取り上げる科目）に分けてリストアップし、学生ポータルに掲載しています。

またその中から A 科目の一部について、担当者のメッセージやプロフィールとともに紹介するパネル展示を企画し、毎年、前期・後期の履修登録期間に開催しています。パネルは PDF にして、センターのウェブサイトに掲載していますので、ご覧ください。

ジェンダー関連科目紹介

ギャラリー運営

ジェンダー研究センターギャラリー 2025 年度報告

ジェンダー研究センターは、ジェンダーをテーマとする企画展示、センターの研究・教育・社会貢献事業の活動報告など、学内外に向けた情報発信の場として、ギャラリーを運営しています。また、前身の「短大ギャラリー」が行ってきた学院所蔵美術作品の展示、全設置学校全が参加する作品発表展を継続し、園児・児童・生徒・学生および社会人の教養教育の場としての役割も担っています。

2025 年度　ジェンダー研究センターギャラリー展示記録

No.	展覧会名	会期
1	ジェンダー関連科目紹介展	4／1（火）ー4／16（水）
2	ジェンダー研究センター活動報告展	4／18（金）ー5／16（金）
3	STAND Still 性暴力サバイバービジュアルボイス写真展	5／19（月）ー6／14（土）
4	おーる あおやま あーと てん '25 *	6／18（水）ー7／2（水）
5	ジェンダーと表現　織・版画ワークショップ 作品展	7／4（金）ー7／31（木）
6	ジェンダー関連科目紹介展	9／19（金）ー10／1（水）
7	女子教育と教育標本資料 ー短大家政学科被服構成研究室の資料を中心に	前半：10／3（金）ー10／21（火） 後半：10／22（水）ー11／8（土）
8	青山学院創立記念所蔵作品展	11／11（火）ー11／28（金）
9	Art クリスマス　AOYAMA　in　Gallery *	12／2（火）ー12／10（水）
10	ジェンダーを知るためのブックレビュー展	12／12（金）ー1／26（月）

（＊は、ジェンダー研究センターの企画による以外のもの）

No.3
STAND Still 性暴力サバイバービジュアルボイス写真展

近年、日本社会における性暴力という言葉の認知度や注目度は上がっているが、身近な問題として捉える機会はそう多くない。性暴力について触れ、考える機会を提供するという目的のもと、性暴力サバイバー自身がその思いや視点を表現した写真展や、ワークショップを開催している STAND Still 東京との共催により、2022 年度に続き、2 回目の開催。

展示の関連企画として、5 月 21 日、学生を対象とするトーク＆ワークショップを行った。

（文章は一部、SDTAND Still 東京の企画書より引用）

No.5　ジェンダーと表現　織・版画ワークショップ作品展

2025 年度のワークショップで制作された、小学生から社会人まで、また初心者から経験者まで、多様な参加者による、［織］［版画］の作品を展示。

オンラインギャラリー▶

No.10 「ブックレビュー展」

ジェンダーに関心のある教員、学生たちがおすすめの本や映画を紹介する。過去の展示パネルのファイルはセンターのライブラリーで閲覧可。

No.7　女子教育と教育標本資料
ー短大家政学科被服構成研究室の資料を中心に

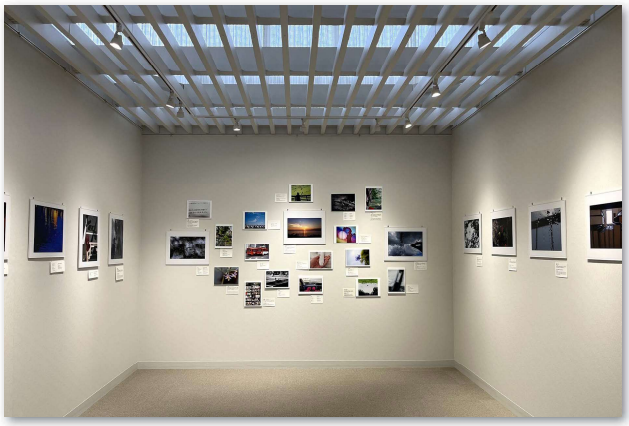
青山学院女子短期大学の閉学に伴い、青山学院資料センター（現 青山学院ミュージアム）に移管された資料のうち、装束雛形（平安時代の装束をまとった人形 8 体）、裁縫雛形（縮小サイズの衣服見本）、風俗解説巻物（古代から近代までの衣装風俗を描いた掛図 40 点）の展示。

短大の装束雛形は、2022 年に武庫川女子大学の研究メンバーによる「有職人形調査」を受けて、武庫川女子大学附属総合ミュージアムにおける展示「女子学生は何を学んだのか ー教育標本資料に見る女子高等教育の黎明ー」（2024 年 10 月 2 日～12 月4 日）の図録に写真が収録されている。同展では裁縫雛形も取り上げられており、この図録を参考文献として、教育標本資料に関する学術的な研究の一端も紹介した。

また風俗解説巻物は、、「大阪樟蔭女子大学所蔵の掛図にみる服飾教育 ー服飾史教授用掛図をめぐってー」[*1] という論文を参照し、全 40 点を半分ずつ、前半・後半に分けて展示した。

言葉や文章による表現だけでは得られない、「直感や体験を通して学習することが重要な教育方法とされ」[*2] てきた女子高等教育、それを実践した短大の教育を振り返る機会となった。

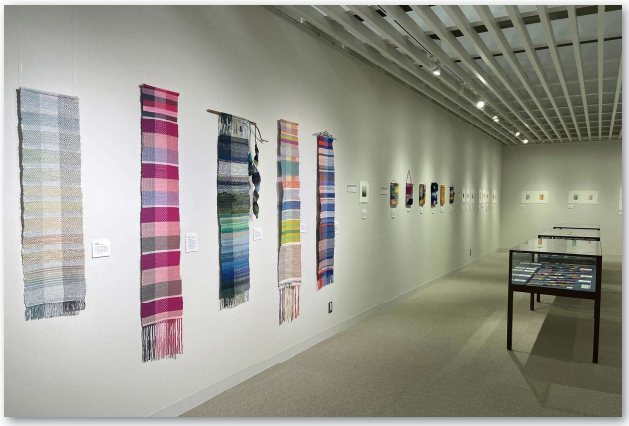
[*1]『大阪樟蔭女子大学研究紀要』第 12 巻、2022 年



No.3　STAND Still 性暴力サバイバービジュアルボイス写真展



No.4　おーる あおやま あーと てん　'25



No.5 織・版画ワークショップ 作品展



No.5 織・版画ワークショップ 作品展



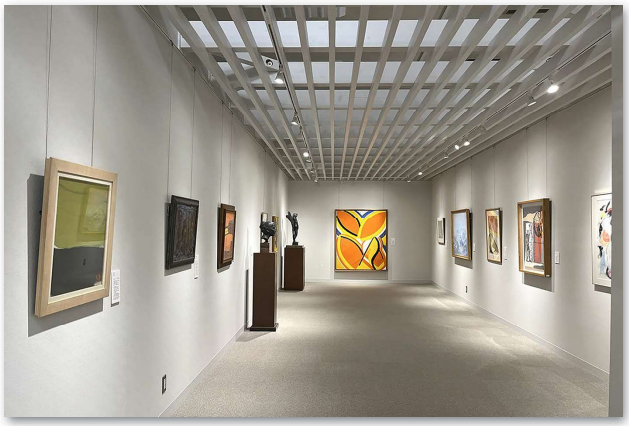
No.7 女子教育と教育標本資料展



No.7 女子教育と教育標本資料展



No.7 女子教育と教育標本資料展



No.8 青山学院創立記念所蔵作品展

［造形表現］織ワークショップ　【前期・後期】

表現を通して自分自身を知ることが、ジェンダーをめぐる問題とその社会背景について考えるアプローチになることから、ジェンダー研究センターでは社会貢献事業・エンパワーメントプログラムの一つとして、「ジェンダーと表現」のテーマのもとに織と版画のワークショップを開催しています。女子短期大学の教育資産を生かした、社会人から小学生まで、幅広い年齢層が一緒に参加できるユニークなプログラムは、学校教育ではあまり経験することがない、生涯学習ならではの学びの機会といえます。2024 年度後期より大学の社会人向け講座「青山アカデメイア」での開講となり、受講者の広がりがみられます。

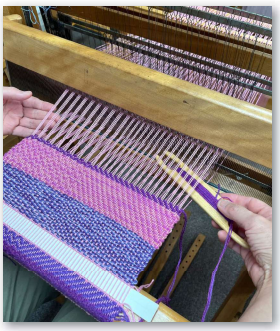
織ワークショップでは、初めて参加される方向けの「体験コース」と、これまでの受講者を対象とする「応用コース」の２通りの講座を設けています。

前期：応用コース［A］「足踏み織機を使って織物基礎を学ぶ」　4 月 26 日～7 月 12 日（全 5 回連続講座）
体験コース［B］「平織の基礎を学ぶ」　6 月 14 日
体験コース［C］「糸を紡ぐ原理と平織を学ぶ」　6 月 28 日
後期：応用コース［D］「足踏み織機で平織の平面効果とノッティングなどのレリーフ効果を学ぶ」
9 月 20 日～12 月 13 日（全 5 回連続講座）
体験コース［E］「ノッティング織を学ぶ」　11 月 15 日
体験コース［F］「フエルトメイキング」　11 月 29 日

講師：阿久津光子 氏（元女子短期大学教授・ファイバーアーティスト）・**山本真由 氏**（織作家・織工房主宰）

応用コースはいずれも４枚綜絖の足踏み織機（ミニルーム）を使って本格的な織を学びます。前期は、組織織りの基本を学び、後期はヨコ糸だけを見せる織り方で、平織に加えてノッティングやスマックという立体的な表現を学びました。連続講座はスケジュール調整が難しいこともありますが、織機を使う体験はなかなかできないので、ぜひ挑戦してみていただきたいと思います。


［織 A］６月７日


［織 A］６月７日


［織 A］７月 12 日


［織 A］７月 12 日


［織 D］９月 20 日


［織 D］10 月４日


［織 D］10 月４日

体験コース前期の B は木枠にタテ糸を張り様々な素材のヨコ糸やボタンなどを織り込み、オーナメントを作り上げました。C は自分で原毛をミックスしてオリジナルの糸を紡ぎ、それヨコ糸にして厚紙で平織りするという新しい内容でした。簡単な道具を使って糸を紡ぐことができることに驚きを感じます。

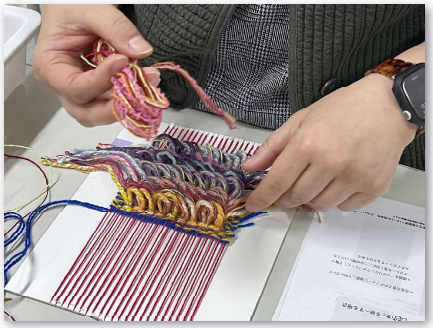
後期の E はペルシャ絨毯と同様の技法で、毛足のある織物の表現を体験しました。F は羊の原毛が石鹸水で縮絨（フエルト化）する原理を用いて、染色された色原毛や毛糸を使って好きな絵柄をデザインし、不織布（織られていない布）を制作しました。体験コース B・F では小学生も参加し、大人と一緒に制作を楽しみました。



［織 B］6 月 14 日



［織 C］6 月 28 日



［織 E］11 月 15 日



［織 F］11 月 29 日

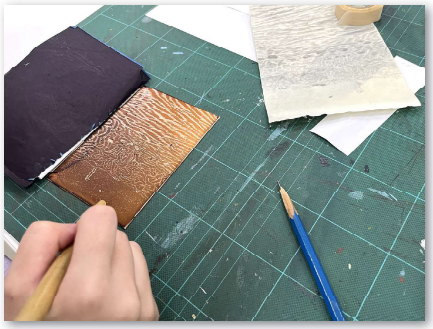


［織 F］11 月 29 日

［造形表現］版画ワークショップ　【前期・後期】

版画は絵画に比べて、素材や技法の要素が強い表現方法のため絵を描くことに苦手意識を持っていても、技法を学ぶプロセスを経ることによって「表現」に対するハードルが下がります。

本ワークショップでは受講者が版を作成し、プロの刷り師である講師が刷りを行います。技法、刷り方、刷り色によって作品が変化する表現の多様性が、版画の魅力です。1 人 3 点の本刷りは色使いを変えることができるので、他の参加者の作品に触発されたり、講師のアドバイスを参考に、1 点ずつ仕上げていきます。プレス機を通して紙をめくる度に歓声があがり、1 日集中した疲れも吹き飛びます。





開講日：6 月 21 日・7 月 26 日・10 月 25 日

講師：白井四子男 氏（白井版画工房主宰）

技法：各回とも銅版画の 3 種類の技法の内、一つを選んで制作します。

①エッチング（ハードグランドエッチング、ソフトグランドエッチング*）

②ドライポイント　③メゾチント（アルミ板）

*繊細な線による表現が可能なハード、鉛筆のタッチをいかすことができるソフト、その併用などイメージに合わせて選択します。

エンパワーメントプログラム

ジェンダー研究センターではジェンダー平等、男女共生社会の実現に向けて、大学の教育、研究の成果を生かした生涯教育の取り組みを社会貢献事業の一つとして推進します。

公開講座

はじめの 2 年間は「ジェンダーと学問研究」というテーマで、多様な学問分野からジェンダーについて語るという内容で実施しました。2024 年度は切り口を変えて、テーマを「ジェンダーと表現」として、文学、美術、音楽を専門とする 5 名の講師に講座を担当いただきました。

2025 年度のテーマは「ジェンダーと社会」です。戦後から高度成長期そして現代と、学生たちをとりまく社会は大きく変わり、ジェンダーに対する認識も変化していることに鑑み、戦後の女子短期大学で学んだ女子学生たちの生き方及び現代の多様な学生たちの学びそれぞれに光を当てることで、社会におけるジェンダーの役割と課題を多角的な視点から考える内容としました。

公開講座「ジェンダーと社会」には、対面 83 名、オンライン 46 名、計 129 名が参加されました。

アンケートでは「ジェンダーについては今まで学ぶ機会がなかったので、貴重な学ぶ機会を得て大変感謝している」、「各講師がさまざまな観点からアプローチしていた、多様な講義を聞くことができて有意義であった」といったような感想をお聞かせいただきました。

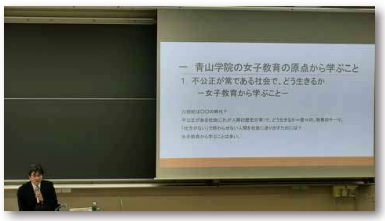
また「今後取り上げて欲しいテーマ」としては、歴史、社会科学、経済、音楽、法学など多岐にわたる回答が寄せられ、受講者の方々の関心や志の高さが伺えました。

2026 年度は「ジェンダーと社会Ⅱ」として、より幅広い分野を取り扱う予定です。

開講日	タイトル	講師
11月8日（土）	「生きる」ための学びとジェンダー ：教室の声を繋ぎ、世界の解像度を上げる	森本 麻衣子　法学部准教授
11月15日（土）	フェミニズム思想の歴史を学ぶ	梅垣 千尋　コミュニティ人間科学部教授
11月22日（土）	「しなやかに夢を生きる」生き方の継承－スクーンメーカーから女子短期大学卒業生へ－	河見 誠　コミュニティ人間科学部教授
11月29日（土）	何を学び、どう生きるのか －青短卒業生聞き取り調査の成果から－	小林 瑞乃　コミュニティ人間科学部准教授
12月6日（土）	ジェンダー、セクシュアリティとアイデンティティ	佐々木掌子　明治大学文学部准教授











エンパワーメントプログラム［ジェンダーと表現］

［インプロワークショップ］『ザ・ベクデルテスト』

6 月 28 日（土）13:30～15:30、演劇ワークショップファシリテーターで元青山学院女子短期大学助教の直井玲子氏を講師に迎え、インプロワークショップ「ザ・ベクデルテスト」を実施しました。

「ベクデルテスト」とは、映画のジェンダーバイアスを測るためのテストのことで、以下の 3 つが条件となっています。

1. ふたり以上の名前のついた女性が登場するか
2. 女性同士が直接会話をするか
3. その会話の内容が男性以外のことであるか



たった 3 つの条件ですが、これにパスする映画は案外多くないのです。『ザ・ベクデルテスト』はこれにインスパイアされたリサ・ローランドが創ったインプロのフォーマット（上演形式）です。参加者からのアイデアをもとに、「3 人の女性」を主人公とする物語を参加者とともに即興で創りあげていきます。強い女性や特別な女性の物語ではなく、ごく普通に生活している身近な女性の物語を描き、女性の普段の生活の中の豊かさ、複雑さを浮かび上がらせていきます。

参加者からは「新たな演劇のあり方に触れることができ、とてもいい経験になった」、「思いがけない展開が自分や他の人から流れ出す楽しさを味わうことができました」といった感想がアンケートに寄せられました。

［ウクライナのろうけつ染め卵 プィーサンカ ワークショップ］

2 月 21 日（土）13:00～16:00、短大北校舎 1 階版画室にて、青山学院宗教センターとジェンダー研究センター共催によるワークショップを開催しました。講師に伝統工芸作家・ウクライナ文化センター理事長のテチャーナ・ソロツカ氏をお迎えし、ウクライナ工芸作家・池間恵子さんのサポートのもと、11 名の社会人参加者、8 名の小学生参加者と付き添いの方、あわせて 27 名がウクライナの伝統文化であるプィーサンカについて学びました。



初めに本学国際マネジメント研究科宗教主任で、ジェンダー研究センターの運営委員である島田由紀教授から、新約聖書・ルカによる福音書をもとにイースターの意味についてお話があり、いのちと平和を祈る祈祷が行われました。

続いてソロツカ氏から、日本で暮らして 25 年になること、ソビエト連邦下のウクライナでは触れることができなかったプィーサンカを日本に来てから知り、学び、人々に広めているというお話がありました。ウクライナでは 10 世紀にキリスト教が伝来する前からお守りとしてプィーサンカを作り、贈りあってきた習慣があり、第二次世界大戦後にアメリカ、カナダに移住したウクライナ人によって広まったそうです。

プィーサンカは卵の殻の表面に溶かした蜜蝋でパターンを描き、染料で染めていくものです。伝統的な方法はろうそくの火で蜜蝋を溶かしますが、学内では直火が使えないため電気の道具を用いました。今回の制作は卵の表面を 48 の三角形に分割するデザインで、池間氏から、伝統的なこの分割数にはさまざまな解釈があるという説明がありました。卵には分割線があらかじめ下描きされており、参加者は初めて使う道具、卵を持つ手の動きに慣れるまで、こわごわと線をなぞっていきました。その後、2 本の線が交差する点を中心に花びらをイメージする形を描くのですが、その頃になるとだいぶ慣れてきて、また各自の工夫を加えていく余裕も生まれました。

パターンを描き終えた後､染料で着色していきます。ソロツカ氏は色の組み合わせをアドバイスしたり、イメージに近づけるため複数の色を染め重ねる提案をされたりと、参加者の希望にきめ細かく対応してくださいました。最後に講師の方たちがヒーターを使って蜜蝋を溶かすと、黒っぽく着色されている蜜蝋の下から鮮やかな色が表れます。ろうけつ染めの原理を知っていたり、プィーサンカづくりを体験した者ですらワクワクしますが、初めての参加者にとっては驚きの瞬間です。順番に一つひとつの作品ができあがっていきましたが、そのたびに歓声が上がりました。

同じ分割パターンであっても、花びらの描き方の違いや配色の妙によって、一人ひとりの感性の違いが感じられる作品が揃いました。最後に作品を手にした皆さんが、ソロツカ氏を囲んで記念撮影してワークショップを終えました。

参加者のアンケートには、「成り立ちやウクライナの歴史も聞けたのが良かった」「大人も子どもも一緒に体験できた。異文化に触れることができた。先生方のサポートが素晴らしかった」「先生方がこまめに声をかけてくださり、質問しやすかったりと、サポートしていただけた」「みんなのペースでのびのびできて楽しかった。他の受講者の方の制作も見ることができてとても刺激を受けた」「春のイースター前に、季節行事にぴったりで良かった。お守りの意味があるプィーサンカ。体験後も大切に飾ろうと思う」といった感想がありました。








渋谷区との協働

東京レインボープライド2025　渋谷区×区内4大学 協働ブース出展

6 月 7 日（土）及び 8 日（日）、代々木公園にて開催された“性”と“生”の多様性を祝福するイベント「Tokyo Pride 2025」に、渋谷区の区内 4 大学（実践女子大学、聖心女子大学グローバル共生研究所、津田塾大学、青山学院大学ジェンダー研究センター）で協働して、ブースを出展しました。

Tokyo Pride は、前年までは「東京レインボープライド」という名称で、例年 4 月に開催されていました。新たな名称には「LGBTQ+ コミュニティの中にも広がる多様性に目を向け、一人ひとりの当事者が持つ多様なアイデンティティを尊重する」という意図が込められているということです。また、開催期間も 2025 年から「プライド月間」である 6 月に変更となりました。

協働ブース出展の狙いは、LGBTQ（アライ）の学生が各大学と繋がるきっかけをつくり、区内の大学における当事者学生向けのセーフスペースづくりの後押しとすることです。その目的を達成するため、2025 年は、ブースに「自分らしさ度調査」ボードを設置して来場者の方にシールを貼ってもらう、「みんなが自分らしくいられるためには何が必要か？」といったテーマのメッセージボードにふせんでメッセージを残してもらう、各大学・センター・研究所の広報やイベント告知をするなどの企画を行いました。

開催日の 2 日間、協働ブースには述べ約 3,780 人の方々にご来場いただき、たくさんのふせんを貼ってもらいました。ブース内に設置したボードには合計で 300 を超えるメッセージが集まり、今なお日常の中にあるバイアスやマイクロアグレッションによって傷つく経験をしている当事者の方がたくさんいるという事実が浮き彫りになると同時に、みんなが自分らしくいられるために必要なものとして「愛」、「平等な社会」、「私自身を見てくれる仲間」など、様々な声や意見を聞かせてもらえました。







当日は、6 名の青学生にボランティアスタッフとして協力してもらいました。4 大学合わせて計 24 名にもなる学生スタッフたちからは「様々な人とお話することができ、刺激になった」、「来てくれた人が笑顔になっているのを見れて良かったです」、「参加者の考えや思いを可視化できた点も良かった」などといったポジティブな感想が寄せられました。

一般の来場者、学生スタッフともに満足感の高い 2 日間になったことと思います。

また、例年、ジェンダー研究センターは Tokyo Pride（東京レインボープライド）の協働ブース出展に合わせて、学内で関連イベントを開催しています。ブース出展の目標のひとつである「当事者学生のつながる場の提供」や「セーファースペースづくりの促進」を達成するための一環として、これまでは＜アイリス＞の方々に「にじいろ読書カフェ」という性の多様性をテーマとした読書会の出張開催をしていただいていたのですが、2025 年は「QUEER LIBRARY WEEKS - クィア・ライブラリー・ウィークス -」という独自の企画を行いました。本企画については、是非その報告パネルをご覧ください。

映画『ブルーボーイ事件』試写会

11 月 5 日（水）、映画『ブルーボーイ事件』（2025 年 11 月 14 日公開）の試写会を、本学本多記念国際会議場にて、渋谷区（渋谷インクルーシブシティセンター〈アイリス〉）との共催で開催しました。

本作は、1960 年代に実際にあった出来事をもとにした作品です。「ブルーボーイ」とは当時、性別適合手術を受けていながら戸籍上は男性のまま売春を行っていた人々を指します。彼女たちは、戸籍上の女性を対象とする売春防止法の適用を受けず、摘発を免れていました。そこで警察は風紀取締の強化を目的に、旧優生保護法の規定に反して生殖不能手術を行っていた医師を同法違反として摘発します。映画は、その医師の裁判を主な舞台に、手術の是非をめぐる議論や、証人として登場する「サチ」そして彼女を取り巻く人々の葛藤と、当時の厳しい社会状況を丁寧に描いています。

上映中にはときおりすすり泣きが聞こえるなど、多くの方の心に深く響く時間となりました。上映後には、監督の飯塚花笑氏と主演の中川未悠氏によるトークセッションを実施し、来場者からの質問も交えながら、終始あたたかな雰囲気の中で進行しました。

飯塚監督からは、実際の裁判資料を丁寧に読み込みながら制作に臨まれたことや、証人たちの言葉や思いを大切にしつつ物語として描いていくうえでの工夫、また 1960 年代の空気感を映像として再現する難しさなどについてお話しいただきました。

また中川氏からは、サチという役とご自身との共通点や違いを意識しながら役作りに向き合われたこと、印象的なセリフから多くのことを感じ取られたこと、そして役として厳しい言葉を投げかけられたりする場面の撮影に際して、共演者から支えられた経験など、作品の背景をより身近に感じられるお話を伺うことができました。

事後アンケートでは、「当時ならではの状況と、今もなお続いている課題の両方を考えさせられた」「観る側も多くを学ぶことができる作品だと感じた」といった声が寄せられました。

センターとしても、映像を通じて社会課題について考える機会の大切さを改めて感じており、今後もこうした取り組みの可能性を広げていきたいと考えています。





他機関との研究・協働

シンポジウム「なぜダイバーシティ教育を支える組織が大学に必要なのか」

12 月 20 日（土）、早稲田大学においてシンポジウム「なぜダイバーシティ教育を支える組織が大学に必要なのか」（主催：早稲田大学ジェンダー研究所・教育総合研究所）が開催され、当センターを代表して西本あづさセンター長（本学文学部英文学科教授）が登壇しました。

本シンポジウムは、「すべての人が成長できる環境を築くこと」が大学におけるダイバーシティ体制の実現につながるという考えのもと、高等教育機関におけるダイバーシティやジェンダー教育の推進体制について、各大学の取組や体制整備の過程で生じる課題を共有することを目的として開催されたものです。

当日は、西本センター長のほか、東北大学ダイバーシティ・エクイティ＆インクルージョン（DEI）推進センターの田中真美センター長、同志社大学フェミニスト・ジェンダー・セクシュアリティ研究（FGSS）センターの秋林こずえセンター長、早稲田大学ダイバーシティ推進担当理事の篠原初枝理事が登壇し、早稲田大学ジェンダー研究所の村田晶子前所長による課題提起を受けて、活発な議論が交わされました。

西本センター長からは、当センターの取組の紹介に加え、ダイバーシティを議論する際に、言葉だけが先行し、実際には「現状の中で自分の居場所を見いだせない人びとの声」が十分に取り上げられていないのではないか、また、現状に包摂されていると感じる人だけで議論が進むことで、ダイバーシティが現状を大きく変えない範囲での部分的な修正にとどまってしまうのではないか、という問題意識が示されました。

こうした課題に対する一つの方途として、センターがセーファースペースとしての役割を担い、多様な学生の声を丁寧に拾い上げていくこと、またイベント等を通じてダイバーシティに関する理解や関心を広げていくことの重要性が共有されました。

さらに、登壇者やフロアとの質疑応答を通じて、大学におけるダイバーシティの実現には、学生のみならず教職員への啓発や支援体制の充実が不可欠であることが確認されました。また、ジェンダー平等やダイバーシティ推進の取組においては研究と実践が密接に結びついている一方で、大学の組織上は研究領域と支援領域、さらには学生支援と教職員支援が分けて扱われがちであるという課題も共有され、従来の枠組みにとらわれない新たな体制を大学全体で模索していく必要性が示されました。

事後アンケートでは、「青山学院大学の取組は、女子短期大学の閉学という組織的な決断を発展的に活かした点で大変意義深いと感じた」「都心部にとどまらず、地方へどのように広げていくかについて、さらに議論を深めていきたい」といった声が寄せられました。



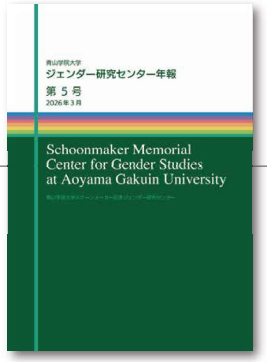


当センターとしても、今後、高等教育機関同士の連携を一層深めながら、ダイバーシティの推進に引き続き取り組んでまいります。

刊行物

年報第 5 号（2025）発行

年報第 5 号（2025）が、2026 年 3 月 25 日に発行されました。ウェブサイト掲載のPDF版での発行としています。第 5 号の内容は以下のとおりです。



ジェンダー研究センター 2025 年度活動記録
ジェンダー研究センターギャラリー 2025 年度展示記録
ジェンダー研究センター 2025 年度研究プロジェクト

年報第 5 号

ジェンダー研究センター指定型研究プロジェクト
「青山学院における女子教育の検証 - オーラルヒストリー・プロジェクト II-」(2023/4/1 - 2025/3/31)

プロジェクト概要 …… 小林 瑞乃
青山学院女子短期大学同窓会北海道支部卒業生 聞き取り調査のまとめ
— 1966(昭和 41) 年から 1972(昭和 47) 年卒まで …… 輪島 達郎
青山学院女子短期大学同窓会東北支部卒業生 聞き取り調査のまとめ
— 1965(昭和 40) 年から 1974(昭和 49) 年卒まで …… 西山 利佳
青山学院女子短期大学同窓会東海支部卒業生 聞き取り調査のまとめ
— 1967(昭和 42) 年から 1974(昭和 49) 年卒まで …… 後藤 千織
青山学院女子短期大学同窓会関西支部および中国支部卒業生 聞き取り調査のまとめ
— 1964(昭和 39) 年から 1973(昭和 48) 年卒まで …… 趙 慶姫
青山学院女子短期大学同窓会四国支部卒業生 聞き取り調査のまとめ
— 1965(昭和 40) 年から 1972(昭和 47) 年卒まで …… 河見 誠
青山学院女子短期大学同窓会九州支部卒業生 聞き取り調査のまとめ
— 1968(昭和 43) 年から 1974(昭和 49) 年卒まで …… 菅野 幸恵
青山学院高等部出身短大卒業生 聞き取り調査のまとめ
— 1965(昭和 40) 年から 1973(昭和 48) 年卒まで …… 山田 美穂子
総論 第 2 期聞き取り調査 (1964-1974 年卒) を終えて …… 小林 瑞乃
本研究プロジェクト調査一覧

ジェンダー研究センター公募型研究プロジェクト
「フェミニスト神学を通して考える思想と実践の総合的研究」(2023/4/1 - 2025/3/31)

アメリカメソジスト女性のフェミニズムと神学思想
— 20 世紀前半における日本人女性への影響 …… 大森 秀子
南北戦争前の禁酒運動における自己犠牲批判
— 離婚法改正を求める女性たちのキリスト教理解から …… 後藤 千織
イエスの生と死と犠牲儀礼、その聖書的な根拠 …… 福嶋 裕子
キャサリン・ケラーのカウンター・アポカリプスとエコロジー
— ロレイン・ハンズベリー、キャリル・チャーチルの黙示的演劇 …… 堀 真理子

性的同意ハンドブック「探検しよう！私とあなたの気持ちを守るには」

2025 年 4 月 1 日（火）に実施された入学式にて、約 5000 人の新入生を対象に、性的同意ハンドブック「探検しよう！私とあなたの気持ちを守るには」を配布しました。本ハンドブックは、本学学生に性的同意の大切さや性暴力の深刻さ、第三者介入の方法、相談窓口などについての情報を提供するものです。

ハンドブックの作成は、学生の有志と一緒に 2022 年度の夏頃から始まりました。2023 年度に初となる新入生への配布を実施した後、様々な方からより良い内容にするためのアドバイスをいただき、次年度の入学式での配布に向けて内容の見直しを行いました。

下記のコンテンツにある「探検家になろう！」とは、自分について考えてみたとき、ひとりひとりが異なる独自の価値観や性質についてまずは自分から知ることで、次に自分と同じように異なる多様な人が存在することへの気づきから始めていこうというメッセージでもあります。そうして、自分を含め様々な人が生きる社会で互いに心地よく暮らすためには、あなたや他の人…みんなの心と体を大切にして接し合う必要があること、そのための知識を探っていくということです。

意図せず性暴力の当事者となって辛い思いをしたり、誰かに辛い思いをさせてしまったりしないよう、探検家となって性の島を探索する、これがハンドブックのコンセプトで、作成当時から制作者の想いと共に引き継がれています。

ハンドブックは毎年度ブラッシュアップを繰り返し、2025 年度も入学式にて配布したものからさらに内容を更新しました。このたび作成した「2026 年度版」は、2026 年 4 月 1 日（水）の入学式にて配布されます。

ハンドブックは、センター内などで入手できます。また、PDF 版とテキストデータ（.txt）版をセンター Web ページにて公開していますので、ぜひご覧ください。学生ポータルからも PDF 版にアクセスできます。



CONTENTS

探検家になろう
性の島の MAP
性的同意本編
　バウンダリー
　性的同意
　性暴力
　第三者介入
制作者紹介

PDF 版はこちら



居場所づくり・ライブラリー運営

ジェンダーやセクシュアリティに関心を持つ学生および教職員がともに学び、語り合うことができる居場所として、「コミュニティスペース」などを運営しています。

コミュニティスペース

ジェンダー、セクシャリティ、フェミニズムなどについて学生同士、またセンターのスタッフと自由におしゃべりする場として、月 2 回、開催しています。

全ての人が安心して参加できるよう、「話したくないことは話さない」「相手を否定しない」などのグランドルールを定めています。



開催スケジュールはこちら



学生企画「もやもやカフェ」

もやもやカフェとは有志の学生たちが主体となって企画する、学校生活でのもやもや、バイトでのもやもや…など、日頃感じている“もやもや”を気軽に話し合う場です。

本企画は、年間を通して学生企画者を募集していますので、関心がある方はぜひセンター宛にご連絡ください。

2026 年 3 月 5 日（水）
14:00〜16:00
@青山キャンパス



ライブラリー

ジェンダーやセクシュアリティなどに関する図書、雑誌、コミックスなどを 1000 冊以上所蔵しており、誰でもライブラリーでの閲覧ができるほか、学生と教職員には貸出も行っています。図書リストはセンターのWebサイトに掲載しており、順次、更新しています。

ギャラリーで毎年度開催している「ジェンダーを知るためのブックレビュー展」のパネルもファイルにアーカイブしていますので、ジェンダーに関心がある教員、学生らによるレビューもご覧いただけます。

また、性に関する情報が記載されたハンドブックやリーフレット、さまざまな学外団体のパンフレット、ZINE なども数多く揃えており、一部を除いてご自由にお持ちいただけます。最新のイベント情報も掲示していますので、ぜひチェックしてみてください。

図書リストはこちら



特記事項

- 2025年4月1日　初代センター長、申惠丰・法学部ヒューマンライツ学科教授に続き、２代目センター長として、西本あづさ・文学部英米文学科教授が就任
- 2026年3月31日　西本あづさ氏がセンター長を退任